

境内照らす5000の灯り

第37回みたま祭

滋賀県遺族会が主催する県内3万4千余の戦没者の御霊をなぐさめる、第37回「みたま祭」が8月13日夜から彦根市の滋賀県護国神社で始まった。

午後6時日暮れとともに平和への祈りを込めた、約5千の提灯が境内を照らすと、参拝者から歓声が上がった。

バスや自家用車で訪れた遺族らは、身内の人の提灯を探

し、写真を撮った。写真の撮ったり、模擬店で「ビール」や「やきとり」を求め、子どもらは金魚すくいで興じ、帰省中の家族連れも多く、境内は賑やかな中にも和やかなムードに包まれた。参拝者は、知友を見つけながら談笑したり、カメラを向け合ったり、史上最も暑い真夏の一夜をおもいおもいに満喫していた。

最終の15日は、午前11時30分より本殿

で、全国戦没者追悼式に合わせて、遺族ら1000人が参列し、終戦記念式典が行われた。山本賢司宮司による祝詞奏上の際、松井尚之滋賀県遺族会会長が玉串を奉納し、遺族らがしたたる汗を拭いながら御霊の安らかならんことと、わが国の永劫の平和と繁栄を祈念した。

遺族会員は、今こそ、風化しつつある戦争の体験と記憶を

正しい認識のもとに、次世代に語り伝えてゆく使命を痛感し、その突破口として、次世代研修の参加者をコアとした組織化を真剣に考えるべき時機であることと思う「みたま祭」であった。

(広報 原幸男)

みたま祭を終えて

第37回みたま祭は、多くの方々のご協力を頂き、滞りなく全日程を終えるこ

とが出来ました。境内には五千のみあかしを灯し、本殿両翼廊では、献花・海外戦跡巡拝の写真展示と華を添えていただき御霊をお慰めすることが出来ました。

暑さ殊の外厳しい毎日でしたが、好天に恵まれ、多くの方に参拝して頂きました。戦後68年目となり、会員も高齢化し、往時と比べると、参拝者も年々少



おことわり

機関誌「遺族の友」第243号は平成25年10月31日発行の予定でしたが、65周年記念滋賀県戦没者遺族大会開催に合わせて、繰上げ、平成25年10月19日発行いたしました。

これまで平和祈念滋賀県戦没者追悼式会場であった膳所公園内「英霊塔」では、滋賀県遺族会創立65周年記念の「滋賀県戦没者英霊塔の由緒」一碑が建立され、追悼式に引き続き「英霊塔」へ参拝した県下各地の皆さんに披露された。

「英霊塔」へ参拝した皆さんに披露された滋賀県戦没者英霊塔の由緒碑(膳所公園)

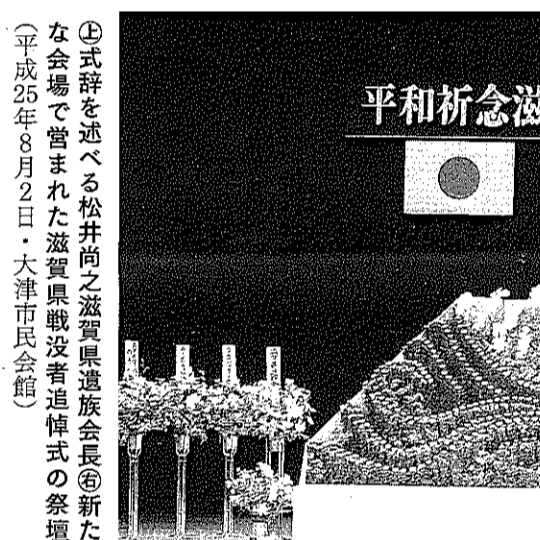
ますます。皆様方の更なるご支援とご協力をお願い致します。お礼の言葉とさせていただきます。

(祭祀「みたま」 川崎和一)

舞台中央には菊花で埋められた祭壇に「滋賀県戦没者之霊」標柱が整えられ、各団体から寄せられた供花が両側に飾られ中央に献花台が置かれた。

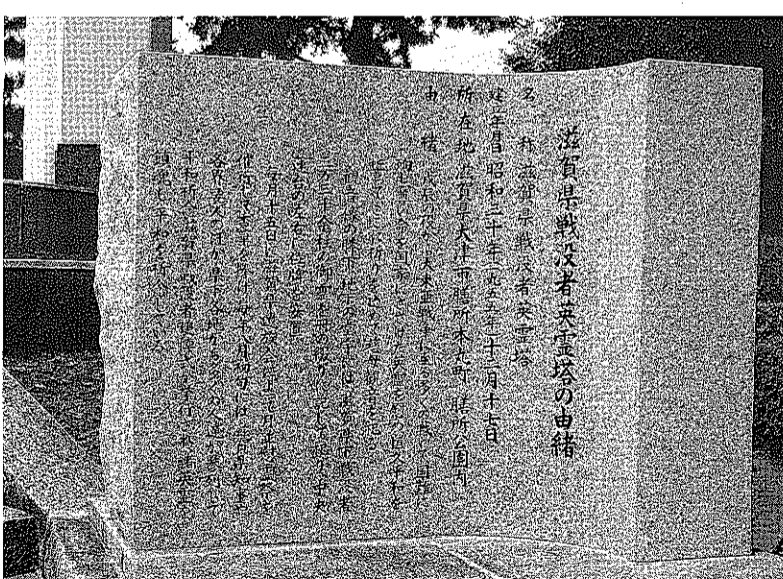
式典は二部形式で行われ、第一部では開式のことば、国歌斉唱、黙禱に続き松井尚之滋賀県遺族会長の式辞。その後、

平成25年8月2日、今年度から新たな式典会場となった大津市民会館で平成25年度平和祈念滋賀県戦没者追悼式が挙行され、県下各地から遺族関係者ら大勢の参列者900人でホールは満席となった。



滋賀県遺族会創立 65周年記念事業

滋賀県戦没者英霊塔の由緒碑 建立



これまで平和祈念滋賀県戦没者追悼式会場であった膳所公園内「英霊塔」では、滋賀県遺族会創立65周年記念の「滋賀県戦没者英霊塔の由緒」一碑が建立され、追悼式に引き続き「英霊塔」へ参拝した県下各地の皆さんに披露された。

これまで平和祈念滋賀県戦没者追悼式会場であった膳所公園内「英霊塔」では、滋賀県遺族会創立65周年記念の「滋賀県戦没者英霊塔の由緒」一碑が建立され、追悼式に引き続き「英霊塔」へ参拝した県下各地の皆さんに披露された。

新たな県戦没者追悼式

大津市民会館で初開催



発行所
一般財団法人滋賀県遺族会
滋賀県大津市におの浜4丁目2-34
滋賀県遺族会館
電話 (077)522-7227
FAX (077)522-7233
発行責任者
滋賀県遺族会長
松井 尚之

嘉田由紀子滋賀県知事、宇賀武滋賀県議会議長、越直美大津市長より諸々追悼の言葉をいただき、追悼電文披露に続き、木津美智子滋賀県遺

族会副会長が平和宣言。役員、参列者代表、来賓の献花に続き、例年行ってきた焼香がホール内では許されず、参列者全員が戦没者の霊を思

い浮かべ、安らかにと菊花を捧げた。第2部は祭壇前で大津市仏教会僧侶の皆さまによる追悼法要。参列者全員が僧侶の読経に合わせて

心で経文を唱え合掌、礼拝。閉式のことばを最後に、新たな式典は盛大、かつ厳粛に終了した。

(広報 田中正彦)

遺族の願い 要望書にこめて

第32回慰霊と平和祈願リレー行進

8月9日(金) 滋賀県庁前広場

この日、今季最高の暑さが報じられ、朝から太陽がじりじりと頭上を照らす。県下各地より集結したリレー行進団1355人が勢ぞろい。行進用のゼッケンをつける者、談笑する者、思い思いの姿で開会の言葉を待つ。報道陣、県民委員のカメラも待ち構える。

今回の行進と手交式は、滋賀県庁→大津市役所→高島市役所→長浜市湖北支部→米原市ジョイ伊吹→彦根市役所→護国神社・到着式の行程である。

事を祈る」と。

また、滋賀県議会代表山田和廣副議長より「先人の努力により平和な日本の今日がある。環境、福祉あふれる県へと発展してきたが、これも尊い246万の英霊の御霊や遺族の方々の賜物。世界では多々紛争があり、世界平和には遠い現実。心豊かに真の平和を求め、世界の恒久平和に向け努力する」とのメッセージを。

午前9時30分開会。滋賀県遺族社会福祉部会中村武治部会長の開式の言葉で緊張感が漂い、静寂が辺りを包む。松井尚之滋賀県遺族会長より要望書が朗読され、滋賀県知事代理那須安積健康福祉部長に手交され激励の言葉をいいたく。

力したい」との言葉で代表される。

また、各市において、市主催の慰霊祭の開催であったり、ロビーに平和の尊さへのパネルやメッセージの展示であったり、形は様々であるが英霊顕彰への取り組みが垣間見られ、地元の遺族会の方々の苦勞と努力を実感する。

『子や孫の世代に同じ遺族をつくってはならない。終戦68年経った今、戦争の悲惨さを伝えるべく、滋賀より全国へ発信していく。今回の行進が無事終了されることを祈る」と。

午後5時30分、行進団はバス移動が主

と見え、誰一人暑さにもめげることなく無事元気に最終目的地 滋賀県護国神社に到着。

『子や孫の世代に同じ遺族をつくってはならない。終戦68年経った今、戦争の悲惨さを伝えるべく、滋賀より全国へ発信していく。今回の行進が無事終了されることを祈る」と。

を報告する「到着式

後、5時45分散会となる。各市役所で市長及び市長代理の方に手渡した要望書の内容は次の通りである。(広報 谷口晋子)

先の大戦でかけがえのない肉親を失った私たち戦没者遺族をはじめ、戦争犠牲となられた国民は、毎年この暑い夏になりますとあの悲惨な戦争が思い出され、胸の痛みを覚えます。戦後68年、日本は世界に類を見ない発展をとげました。しかし、今の日本の現状を見ますと、日本を取り巻く近海で様々な外交問題が日本を直撃しています。これは、日本独自の歴史、文化、伝統といったものがやもすると忘れがちになっており、日本人として我が国の基盤がゆらいでいることに他ならないと考えます。戦地で散華された英霊のみなさまの願いであった「自立国家日本の確立」「世界の恒久平和」の実現を果たすこと、そして我々の後世に引き継いでいくことが現在に生きるわれわれの大きな使命であります。

手交式会場	議員	手交式会場	議員
滋賀県庁	滋賀県議会副議長 山田 和廣	大津市役所	大津市議会議員 佐々木松一
	衆議院議員 上野賢一郎		同 石黒賀津子
	滋賀県議会議員 佐野 高典		同 岸本 典昭
	同 高田 恵子		同 伴 孝
	同 今江 政彦		同 八田 憲児
大津市役所	同 山本 進一	同 近藤 眞弘	同 桐田 真人
	大津市議会副議長 仲野 弘子	同 貴野 明	高島市議会副議長 澤本 長俊
	滋賀県議会議員 目片 信悟	滋賀県議会議員 清水 鉄次	滋賀県議会議員 土田 良夫
	大津市議会議員 竹内 照夫	同 長濱市議会議員 竹本 直隆	同 長濱市議会議員 竹本 直隆
	同 武田 平晋	同 長濱市議会議員 竹本 直隆	同 長濱市議会議員 竹本 直隆
	同 泉 恒彦	同 長濱市議会議員 竹本 直隆	同 長濱市議会議員 竹本 直隆
	同 杉浦 智子	同 長濱市議会議員 竹本 直隆	同 長濱市議会議員 竹本 直隆
	同 北村 正二	同 長濱市議会議員 竹本 直隆	同 長濱市議会議員 竹本 直隆
	同 園田 寛	同 長濱市議会議員 竹本 直隆	同 長濱市議会議員 竹本 直隆
	同 竹内 基二	同 長濱市議会議員 竹本 直隆	同 長濱市議会議員 竹本 直隆
同 鷺見 達夫	同 長濱市議会議員 竹本 直隆	同 長濱市議会議員 竹本 直隆	

全国戦没者追悼式

私は、東京の日本武道館での平成25年度全国戦没者追悼式に参列いたしました。8月14日米原駅午前10時55分発の「ひかり」に乗り、東京駅に着き貸切バスで靖国神社参拝をしました。ここに戦死者の御霊が祀られていると思うと、当時のことが思い出され感無量でした。

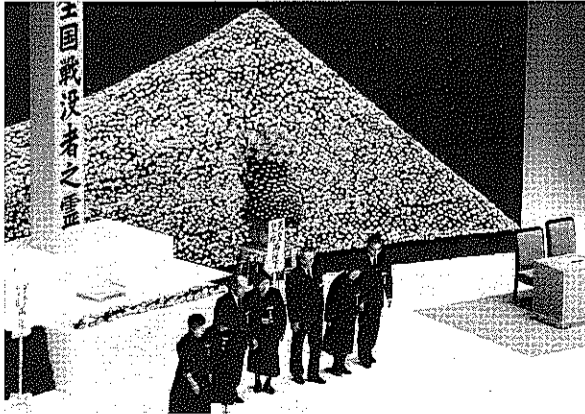
戦後、高校の修学旅行の時、靖国神社の前をバスで通過した時は涙が出て止まりませんでした。14日には心をこめて手を合わせお参りしました。

最後に滋賀県代表として献花させていただき、一生に一度の体験をさせていただき少しばかりの誇りと安堵を覚えました。また、引率して下さった滋賀県庁職員の方々のお陰で何の不安もなく参列出来た事を深く感謝しております。本当にお世話になり有難うございました。(東近江市 佐藤昭子)

68回目の終戦の日を迎えた8月15日、政府主催の全国戦没者追悼式が東京都の日本武道館で開催され、参列いたしました。

式典には全国の遺族、約4700余人。天皇皇后両陛下、安倍晋三首相、衆参両院議長らが列席されました。

午前11時51分開式。次に天皇皇后両陛下がご入場され、一同国歌を唱へる。次に内閣総理大臣が式辞を述べられ、全員一分間の黙祷を行い、次に天皇陛下がお言葉を述べられる。次々と来賓が追悼の辞を述べられ、約一時間の式典が続きました。



全国戦没者追悼式で献花する佐藤さん(中央) 東京・日本武道館

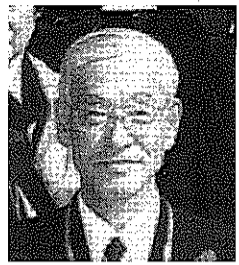
本日追悼式には3年続けて戦没者の父母はなく、妻に当たる方も16人と過去最少であったと聞いています。戦後の時を戦没者と分かち持つてきた人がいよいよ減りつつあります。静かで、たしかに追悼のかたが、むしろこれから大切に思っています。

滋賀県の計らいで靖国神社の参拝をさせていただきました。御霊を悼んで平安を祈り、感謝の誠を捧げることができました。(高島市 前川正男)

沖縄県「近江の塔」平和祈念・戦没者追悼式

感想文

滋賀県議会議長
宇賀 武



去る6月2日から4日にかけて、滋賀県遺族会が主催された、沖縄県「近江の塔」の戦没者追悼式および座間味島・渡嘉敷島での戦跡慰霊巡拝に参加させていただきました。

式典には、沖縄県からもお忙しい中、喜納昌春沖縄県議会議長様をはじめ来賓の方々にも多数ご参列いただき、照りつける太陽の中、盛大かつ厳粛に執り行われました。

「近江の塔」は沖縄戦等における多数の戦没者に対し慰霊の誠を捧げるとともに、戦争の空しさ、悲惨さを次代に伝え、世界恒久平和の実現を誓うために建立されたものであり、凛とした風格のある慰霊塔です。

戦時中に召集令状、いわゆる「赤紙」一枚で召集され、故郷に残した家族を想いながら、亡くなられた戦没者の方々の無念を思うと、万感胸に迫るものがございます。遺族の方が、亡くなられたお父様に対して「呼びかけ」をされていましたが、涙ながら

滋賀県議会議員

野田 藤雄



昨年、沖縄戦没者追悼式に参加させていただき、「フィリピン戦跡慰霊巡拝」

「台湾・東シナ海方面戦跡慰霊巡拝」と、今回で4回目となる戦跡慰霊巡拝に参加させていただきました。

いづれも、私にとっては貴重な体験であり、改めて戦争の悲惨さを痛感いたしました。

大東亜戦争で激戦の地となった沖縄では、昭和20年3月26日から6月23日まで続き、日本人死者、行方不明者は多数の民間人を含め約20万人とも言われています。

また、2日目は、米軍の沖縄上陸第一歩の地となった座間味島で追悼式が執り行われました。この座間味島は、米軍の海空から激しい爆撃を受け悲惨な戦場となり、沖縄での最初の集団自決が行われたそうです。

渡嘉敷島では集団自決跡地を訪れました。ガイドさんの話により、愛しいわが子を殺し、その後両親が自決したとのこと。思わず私も含めて皆さん方目頭が熱くなり、や

戦争の愚かさ 世界に発信

に語られるお父様への思いをお聞きし、思わず目頭が熱くなりました。

私の叔父もフィリピンのレイテ島で戦死しておりますので、遺族の方々の思いをより身近に感じるものがあり、この「近江の塔」を心からお祈りさせていただきます。

また、座間味島・渡嘉敷島では集団自決の碑などの戦跡を巡り、哀悼の誠を捧げるとともに、集団自決についてボランティアガイドの方から説明をお聞きしました。アメリカ軍が島に上陸してきた際に島民の多くの方が自ら命を絶ち、また、我が子や両親を手にかけるという、この世のものとは思えない悲劇がおこりました。

このような悲劇を二度と繰り返さないためにも、私たちは戦争の愚かさや悲惨さを子や孫にしっかりと伝えるとともに、世界に向けて発信していかなければならないと、強く心に刻みました。今回このような貴重な体験をさせていただき、滋賀県遺族会の皆様をはじめ関係の皆様改めて感謝申し上げます。ありがとうございました。

尊い命を賭した英霊に感謝

りきれない気持ちになりました。

追悼の言葉でも申し上げましたが、私は戦争の惨禍を繰り返さないためにも、この島で生じた悲惨な歴史を風化させることなく若い世代に伝えていかなければならないことを改めて胸に刻ませていただきました。

沖縄は、1972年5月15日に本土復帰を果たし41年が経過しましたが、今なお、在日米軍基地は沖縄本島の約18%を占めています。この米軍基地を縮小して初めて本島の本土復帰ではないのでしょうか。

改めて、先の大戦で最愛のご家族を失われ、その悲しみの中にあっても苦難を乗り越えられ、社会にご尽力された遺族の皆様方に改めて感謝を申し上げます。

今日の日本の繁栄は、先の大戦で尊い命を賭して祖国を守ろうと奮闘された英霊に思いをいたし、滋賀で暮らす私たちは、犠牲になられた皆様方のお陰であると、改めて思いを強く抱かせていただきました。

最後になりましたが、今回「一緒にさせていただいた方々に貴重な体験をさせていただいたことに感謝申し上げます」とともに、今後益々の活躍をよろしく願っています。

平和な社会の構築に努力

滋賀県議会議員
富田 博明



「おはよう！東から昇る朝日、あたり前の生活が始まる。今日も元気に幸せな朝を迎えられる。何不自由の無い日本の家庭。

昭和16年12月8日真珠湾奇襲攻撃が始まった太平洋戦争。日本の名譽のために、自分を犠牲にまでして戦い抜かれた日本人魂と、家族を愛し、地域を愛し、日本を愛する優しい心。

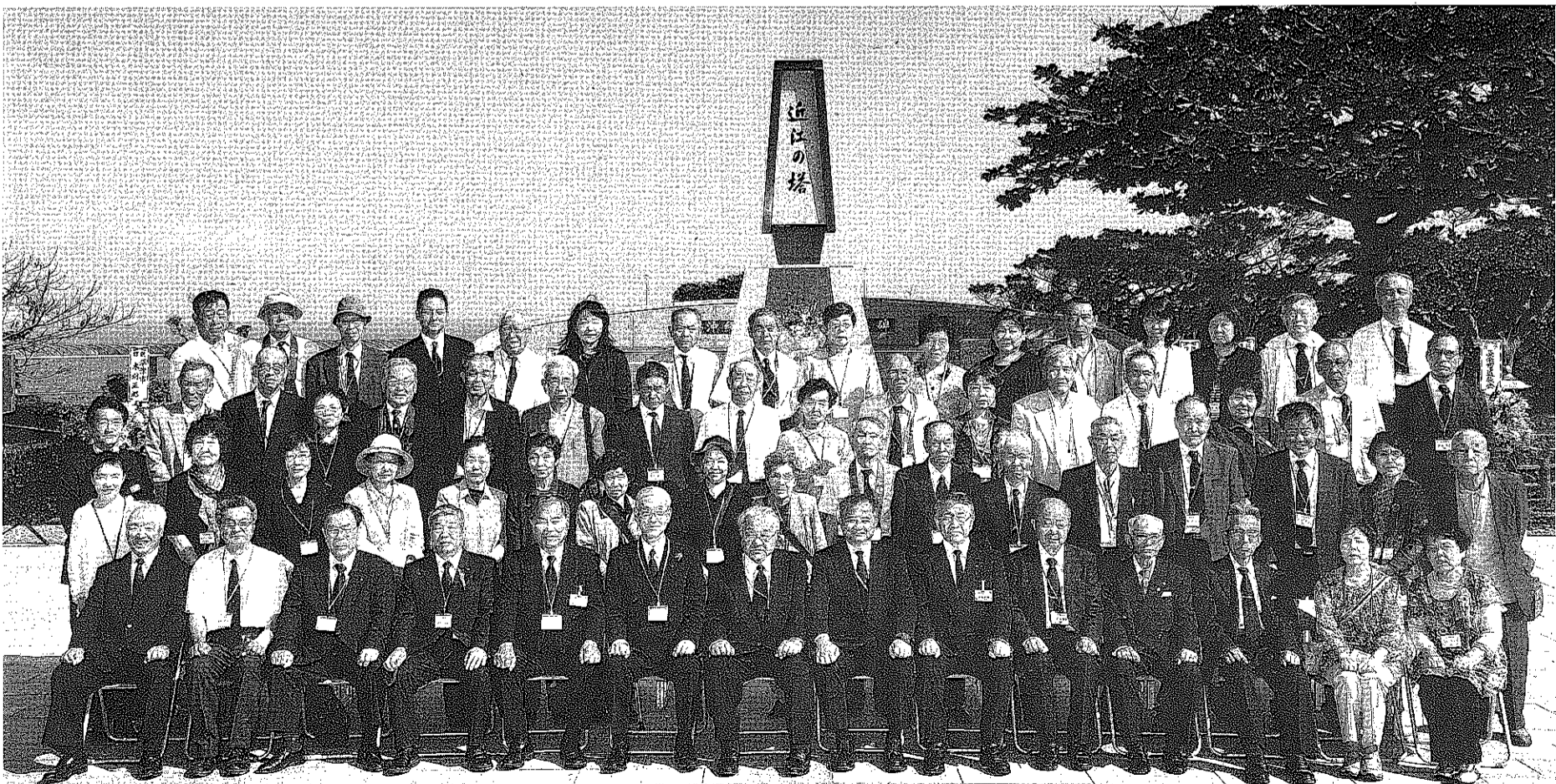
そんな誇り高き尊敬する若き人たちが、先輩として居てくださった事をどれだけの人が承知しているでしょうか。戦地で直接戦死された方々、爆撃や原子爆弾で被害に遭われた方々、数知れない人々の犠牲があつて今日がある事を、どれだけの人が知っておられるのか。私は、今年も日本本土の誓として、戦つていただいた数十万人の戦没者の御霊にお出会いに行つて参りました。

特に、沖縄戦では、数多くの若い少年少女の皆さんが、犠牲になつて日本の防波堤として、戦い抜いていただきました。今も、沖縄は日本国民の命とくらしを守るアメリカ軍の基地問題で、ご苦労していただいています。そんな沖縄での戦跡慰霊巡拝。

「おとうさん！父の顔さえ知らない遺族の方々の悲痛な呼びかけ。両親に甘えてきた私は、改めて親のありがたさを感じずには居られませんでした。戦後生まれの私にとって、遺族の皆様と共に行動することが、しっかりと真実を知り、二度とあやまちを起こさない、平和な社会の構築に貢献出来るものと信じています。

改めて、戦後の混乱した日本を、悲しみをこらえ、戦死者を敬いながら世界に恥じない日本に築き上げていただいた遺族の皆様、頭を下げて敬服させていただきます。今後、なお一層家族や地域のために、ご精進いただきますようお願い申し上げます。

結びに、世界恒久平和と戦没者の皆様に恥じないよう輝く日本のため、微力ではありますが努力することをお誓い申し上げますと共に、滋賀県遺族会の益々の発展と遺族の方々のご多幸とご健勝をお祈りいたします。



平成25年度滋賀県平和祈念・沖縄（南太平洋方面）戦没者追悼式参列の皆さん（平成25年6月2日）

沖縄県「近江の塔」平和祈念・戦没者追悼式

感想文

守山市議会議員
田中国夫



守山市議会議員として今回の平和祈念式典、並びに慶良間諸島戦跡慰霊巡拝に参加させていただきました。

は、会長の山川芳志郎氏、遺児の樋下昭代さん、北村康子さん、川田秋子さん、森田みち江さんの5人の方が参加されました。

参加された女性4人の方々は何れも中州小学校の同窓生で、その内3人の方は同級生で、懐かしい友との沖縄戦跡慰霊巡拝の旅となりました。

6月2日(糸満市)沖縄平和公園、摩文仁の丘、「近江の塔」での戦没者追悼式では、追悼の言葉を述べさせていただきました。

6月3日には座間味島、渡嘉敷島と慰霊巡拝をしました。座間味島内では御霊が祀られている「平和の塔」での慰霊祭で、沖縄戦で父を亡くされた森田みち江さんが「呼びかけ」の言葉を述べられました。

時、私も思わず涙を流しました。私の父も昭和19年9月14日ニューギニアで戦死しているからです。今から17年前の平成8年2月21日、28日に杉江周

戦争の惨禍を後世に

作団長の下、西部ニューギニア地域戦跡慰霊巡拝に参加した時、マノクワリのジャングルの中で父に対して「呼びかけ」の言葉をかけた事がよみがえったからです。

沖縄戦は昭和20年6月23日終結しました。沖縄戦における戦争犠牲者は、20〜24万人を数えることと記憶されています。その内、沖縄県の一級住民の戦没者は9万4千人とされています。今回の沖縄戦跡慰霊巡拝に参加するまでは、沖縄本島決戦は3月26日が沖縄本島上陸と記憶していましたが、座間味島の近くに「昭和20年3月26日午前9時上陸」の碑が建てられていました。このことから沖縄戦での米軍上陸は座間味島から始まったと認識を新たにしました。

守山市遺族会では、太平洋戦争勃発50年の節目に「遺勳」を発行しております。我々遺児にも配布していただきました。それを拝見しますと、守山市の戦死者は1031人おられ、内、沖縄で亡くなられた方は38人でした。「冥福をお祈りするのみです。我々遺児も高齢化を迎え、子や孫にこの惨禍を風化させぬように伝えていかなければならない」と、痛切に感じた次第です。

守山市遺族会では、太平洋戦争勃発50年の節目に「遺勳」を発行しております。我々遺児にも配布していただきました。それを拝見しますと、守山市の戦死者は1031人おられ、内、沖縄で亡くなられた方は38人でした。「冥福をお祈りするのみです。我々遺児も高齢化を迎え、子や孫にこの惨禍を風化させぬように伝えていかなければならない」と、痛切に感じた次第です。

へいわこころをきかぬ

沖縄平和祈願大行進

全県が戦没者慰霊一色に染まる6月22日、滋賀県遺族会を代表して5人は、増矢穂日本遺族会副会長以下各県から参加した54人とともに、夕陽の迫る摩文仁の丘の沖縄平和記念堂で開催された前夜祭に参加しました。

式典に続いて琉球古典音楽の献奏と琉球舞踊が奉納され、幽玄な雰囲気の中に響く旋律と舞姿は、御霊に捧げる追悼の心を更に重厚にするには言葉がありません。

翌23日、梅雨明けの澄み切った青空の下、日本遺族会65人と沖縄県内外各地から参加された約1千人によって、糸満市役所前広場で平和祈願大会を開催した慰霊行進団は、摩文仁の丘平和記念公園を目標とし行進を始めました。

約9kmの沿道では行進団に手を振って激励する人や、給水テントで黒糖や西瓜を提供してもらい、汗だくの2時間半の

行進は「沖縄全戦没者追悼式」会場に迎えられました。式典で「へいわこころをきかぬ」と題した与那国町の小学生1年生安里有生君の平和の詩の朗読に5千人余の参加者から感動の声が広がったのが印象に残っています。式典の後、5人は「近江の塔」に参拝して行進と追悼式参列を報告。続いて「国立戦没者墓苑」で献花。米須霊域の慰霊塔を参拝して御霊のご冥福を祈

りました。県民の方々を含め23万人の尊い命が犠牲になった沖縄戦を想い、悲惨な歴史をしっかりと次の世代に繋ぐ役割の大切さを改めて心した一日でした。(高島市遺族会長 井上秀次)



平和記念公園を目指し行進する慰霊行進団

平和のよるび展 開催 守山市

守山市では、毎年この暑い8月を平和を学ぶ推進期間として、いろいろな行事を行う。守山市遺族会では「平和のよるび展」と名づけて8月上旬遺品を中心に展示、「今年も思い出して下さい、あの悲惨なことを」と訴え、今年で23年を数える事業となっている。

今年、特別展示として、滋賀県遺族会顧問松原善次氏の提案によるアメリカ等に戦利品として持ち去られている、「寄せ書き日」の

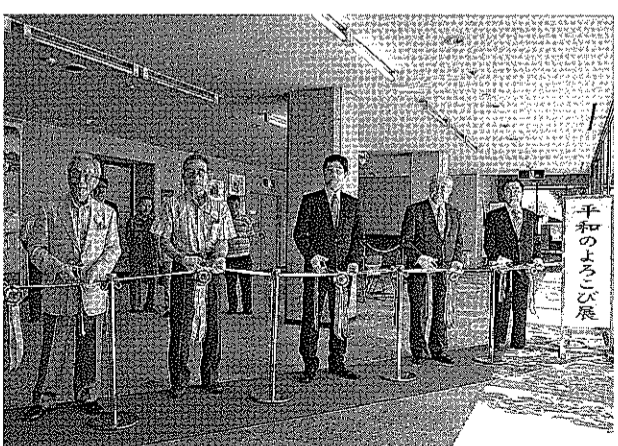
丸」が返還運動推進者によりはるばる太平洋を渡って帰って来たのを展示した。マスコミ等の応援もあり、850人を数える入館者を得た。

「寄せ書き日」の丸は市内分を含めて十数点飾ることが出来た。夫々戦いの場をめぐり多くの物語を秘めている。各々が何かを訴えているようであった。

持ち主も来館していたが、異口同音に「英霊が帰って来たよいうだ」と話を聞きたい。また、靖国神社より花嫁人形を3体預かり展示した。年齢若くして散った英霊に、親が、兄弟姉妹が、若し存命ならばと、人形に思いをのせて、靖国の英霊に嫁がせたものであり、この前に立つとき、また、想いを思うとき胸が詰まる思いは筆舌だけではなかつた。

他、会場は、市内の英霊の遺品、記録、宮本和守守山市長の海外戦跡慰霊巡拝同行の写真記録、次世代戦跡訪問研修報告、市内空襲被害の記録写真、加えて戦中、終戦後の子どもたちの資料等を展示、広く今ある「平和のよるび」を訴えた。短期間ではあったが実を挙げることが出来た。

被虐の記録写真、加えて戦中、終戦後の子どもたちの資料等を展示、広く今ある「平和のよるび」を訴えた。短期間ではあったが実を挙げることが出来た。



テープカットをする國松善次滋賀県遺族会顧問、達坂巖青森市遺族会長、島戸克浩守山市政策調整部長、松井尚之滋賀県遺族会長、山川芳志郎守山市遺族会長(左から)

寄せ書き日と丸返還と売買禁止を

今年の2月、アメリカから一通の手紙が届いた。手紙には、アメリカに今も米兵の持ち帰った「日」の丸や「千人針」が沢山ある。これらは日本兵の大切な遺品なので、戦後70年となる2015年を目標に一点でも多く遺族に返還したいので協力して欲しいとあった。早速返事を書いたが、3月末にも日本に行くのではありませんかと返事があった。4月初め京都駅で



お会いした。手紙の主は歴史研究家のアメリカ人で、その奥さんは京都出身の日本人だった。奥さんのおじいさんはビルマで戦死されたが、6年前おじいさんの日丸がカナダから返還されて、家族も親戚もおじいさんが帰って来たのだと大騒ぎとなり、大変感動したという。それを見ていた主人が、こうしたものならアメリカに沢山あるのだから日本の遺族に返還する運動に立ち上がった。ついでには協力して欲しいとのこと。また、日本でこうした日丸が売買されているので、日

本人として是非抗議行動を起こしてほしいという。驚くともにも激しい怒りを覚えた。早速、関係先に抗議文を送ったが、こうした現状は一人でも多くの日本人に知ってもらう必要がある。このため「寄せ書き日」の丸展の開催を考えた。幸い守山市のご理解とご協力で8月のお盆前にそれが実現した。

しかし、問題はこれからである。戦後70年が経とうという今、米国などに戦利品として持ち帰られた日丸や千人針、家族の写真などは、戦没者の貴重な遺品であり、一日も早く遺族に返還されねばならない。これには遺族が先ず声を上げ、遺品の返還交渉に政府が本格的に取り組みよう働きかける必要がある。また、遺品の日丸がオークションで売買されている現状から、これを直ちに禁止する法律を制定する必要がある。いずれにしても、これには、遺族会が先ずは国会議員にこうした実情を訴え、その実現を強力に働き掛けることである。事は急がねばならない。(滋賀県遺族会顧問 國松善次)

遺族の友

座間味島・渡嘉敷島の悲劇に学ぶ



座間味島遺族会 芳志郎 先生

6月2日から3日間、「平成25年度滋賀県平和祈念・沖繩(南太平洋方面)戦没者追悼式」が行われ、私はこれに参加させていただきました。

1日目、沖繩摩文仁の丘に建つ「近江の塔」の前で私たち63人と地元関係者5人の方が出席して下さり、追悼式典・慰霊祭を厳粛の内にいたしました。

2日目、米軍が最初に日本の領土に上陸した座間味島、次に上陸した渡嘉敷島を訪れ、追悼式や慰霊を行いました。

3日目、首里城公園敷地と嘉敷高地に登り、今話題の普天間基地を視察。大きな基地を見るのは初めてでしたが、戦後が未だ続いている様子を目の当たりにしました。

前日訪問した時もそうでしたが、「呼びかけ」が大きな印象に残っています。「近江の塔」で那須康也氏(長浜市)康彦氏(彦根市)兄弟。私は式典の中で「呼びかけ」の後に平和宣言を朗読しましたが、最初涙で目がうるみ文字が読めないくらい胸に迫りました。

今一つ、今回の慰霊巡拝の旅で印象に残ったのは集団自決でした。とりわけ数と武力に勝る米軍は島を占領して行きます。追い詰められた島民は逃げ場を失い集団自決の道を選びます。島民は車座になり、力のある年若い

た男性が自分の親や妻、子どもをカマヤオノで殺したとされています。中には死に切れず重傷を負いながら生き延びた人もおられたようです。島のあちこちに集団自決の碑が立っていました。作家の曾野綾子氏の涙を誘う碑文も立っていました。言葉を絶する惨たらしい修羅場だったようです。

座間味島や渡嘉敷島では村長や議長、役場の幹部職員等が駆けつけ追悼の言葉を述べられました。滋賀大学からお出で下さったが、滋賀大学の草川一校先生をお存じか。私たちは敗戦で疲弊し、しかも集団自決という実に残酷な修羅場を体験したので、戦争が終わり何とかして立ち直らなアカんの

に、生きる望み、明るさを失っていた。私たちはどうしたら良いのか途方に暮れていた時、文部省に相談したところ、「滋賀大学に草川一校先生がおられる。一度お願いされたら・・・」とアドバイスをいただいた。早速お出会いし事情を説明したところ、「私であれば現地に寄せていただき、島の人たちとじかに触れ合い、フォークダンスやゲーム、車座になってのおしゃべりをさせていただけます。」と聞いていただいた。そして、戦争のこと、集団自決のこと、毎日の生活のこと

を一言も話さなかつた島の人たちが少しづつ、少しずつ明るさを取り戻し、前向きに生きて行くようになるようになった。この非常事態を草川一校先生は救って下さったのです。島にとつては恩人です。帰ったらぜひ感謝していたと伝えてほしい」とのことでした。

実は私事ですが、私は滋賀大学の卒業生で草川一校先生は恩師です。帰郷し、早速草川一校先生にお出会いし、とりわけ渡嘉敷島の皆さんの感謝の気持ちを伝えさせていただきました。先生は現在88歳で腰を痛めて歩行は困難でしたが、元気に当時のことを話されました。「40回訪問させてもらった。最初は集まる人も本当に少なく、口を閉じ、ましてや戦争のこと、集団自決のことなどに話がおよぶことは

タブーでした。でも訪問する回数を重ね、顔見知りが増えてくると次第に打ち解け雰囲気も良くなり、私から見ても明るさ、生きる喜び、望みを取り戻されたように思いました。また、私は教育学部の教員でしたので学生も連れて行きました。理由は、将来先生になり子ども達に戦争の悲惨さ、集団自決の惨たらしさ、修羅場を耐えて生きて来た島の人たちの生きざまに少しでも触れさせ、人と人との殺し合い、集団自決などあつてはならないことを学習させたかったのです。大体10〜15人位が一回の参加者であつたと思います。」と述べられました。草川一校先生の偉大さに感服したひと時でした。

今は年若い母たちの姿、遺族各位の今日までの苦勞を思う時、再びこの繰り返しは絶対にしてはいけないことをこの「沖繩方面戦没者追悼式」に参加して一層決意を新たにしたいところです。

時が流れ、平成25年8月6日(火)午前8時10分から守山市主催の「平和を誓うつどい」が守山市民運動公園平和の広場で開催されました。これには遺族会員ももちろんのこと、市内の小、中、高校生と学校の先生、県会議員、市会議員、自治会長、民生委員、各種団体役員など大勢の方が参加された中での開催でした。宮本和宏市長、田中国議長の後、遺族会長として私も挨拶させていただきました。その時の内容は上述の沖繩訪問時の感想でした。

私の話が終わり、「つどい」が終了した時、吉身小学校教頭川上慶子先生が私のそばに來られ、次のように語られたのが印象に残りました。「私は滋賀大学の2年生の時、草川一校先生と一緒に渡嘉敷島を訪問した。山川先生は話の中で『集団自決で大げがをしたがら生きるのび、島民やその他の人々が生きる望み、将来への夢、明るさを失っていた。島民が疲弊していた』ときれいな言葉で語っておられる。失礼ながらその場に参加した私が見たもの、感じたものはそんな生易しいものではなかつた。なんとも言えない重苦しい、異様な雰囲気でした」と諭されました。いかに悲惨なさまか読者の皆さんに伝えたくて、過日、川上先生から手紙(下)をいただきましたので、紹介いたします。

山川芳志郎先生
平成25年の夏は、新たに、人の力の大きさと平和について考えた夏でした。8月6日、『平和を誓うつどい』で山川芳志郎先生のお話しをうかがったからです。滋賀大学名誉教授の草川一校先生が沖繩の人々の心の支えとして「尽力なされたことと私の沖繩での体験がなくなり、感慨深い驚きを覚えました。昭和54年大学生だった私は、仲間の滋賀大生50人余とともに草川先生の「キャンピング」の講座に参加しました。2日の船旅の末にたどり着いた沖繩・渡嘉敷島は、自然豊かな素晴らしい島でした。白い珊瑚の砂浜、色とりどりの熱帯魚、水深30mの海底まで見通せるクリアな海。後に知ったのですが、渡嘉敷島をふくむ慶良間の海は、世界でも屈指の珊瑚礁です。渡嘉敷島の海辺でテントを張り過ごした一週間は、島のおいしいやおばあさん聞いた話とともにその後の財産となる体験でした。島のおいしいやおばあさんの話は、島の美しさとは対極の凄惨な話でした。この島で起こったとは信じたくない気持ちでいっぱいになりました。大きな夕日が沈むオレンジの海が約1000隻の軍艦で埋まり、軍艦づたいに歩いて海を渡れそうだったこと。その軍艦から毎日毎日一斉に砲撃を受け、しかも、島を区分けし塗りつぶすように集中的に攻撃されたこと。次第に追い詰められた島人はガマに隠れ、水くみ当番にあつた前夜には遺言状を書いたそうです。もう逃げられなくなり自決を決意したとき、もはや死ねる道具がなかつたこと。金属は供出し、鎌や斧があつたらいいほうだった。農具の鋤や鍬を使って自決した人たちがもいた。かわいい子どもから手にかけていった。何とも言えない重苦しい雰囲気になりました。目にはいつばい涙をため、話も途切れ途切れになるおばあさんを見るのも、話を聞くこともつらかつたです。今、文字にしていることもはばかれます。そんな中、生き残った者が抱えた心の闇がいかにひどいものであつたか、想像をはるかに超えます。戦後、疲弊しきつた沖繩の人たちを支え、こうして、学生の私たちに会わせて下さった草川先生の偉大さを感じました。また、死ぬよりつらい思いをして生き延び、史実を語って下さった島人の思いを感じ、考えたいと思います。大阪港から那覇港までの2日間の船旅、さらに沖繩本島から渡嘉敷島に渡るのも船酔いでフラフラで、ベンチでぐったりしていただした私たちに、初めて出会った島のおばあたちは、凍らせたヤクルトを握らせてくれました。沖繩の方言がよくわかりませんでした。が、やはり船に弱い自分たちのために用意してきたものを分けてあげよう、効くからという意が伝わってきました。弱ったものを放っておけない島のおばあさん。感慨深い優しさを感じました。これも草川先生の積み上げられたご尽力のおかげで、沖繩の人々の優しさが損なわれることなく、私たちがもつたように、今も持ち継がれているのだと思います。人と人が殺し合い、理不尽な集団自決に追い込んだ戦争は絶対にあつてはならないこと、いかに平和な世の中が大切であるかを私は目の前の子どもたちにもつたにしっかりと教え、次世代に伝えて行きたいと思ひます。草川先生の偉業と沖繩の遺族の方々の苦悩と強さを伝えて下さった山川先生に感謝いたします。守山市立吉身小学校教頭 川上慶子

ふいふいなみ

戦没者追悼のつどい

愛荘町遺族会 土田 幸夫

慰霊の月を前に、「戦没者を追悼するつどい」が平成25年7月19日、愛荘町社会福祉協議会の主催で開催された。滋賀県遺族会松井尚之会長ら来賓、町内遺族や一般、各団体が参列して、戦没者や戦争の犠牲となられた方々に黙祷を捧げた。

第2部の「往時を偲び昭和を顧みるつどい」で滋賀県遺族会英霊顕彰部会、大長弥宗治部会長の「68年の平和」と題して講話があった。

講話の要旨は次の通り。

昭和18年12月30日、父に米原町役場兵事係が赤紙を持って来て「おめでとうございませう」と告げた。42歳の父は昭和19年1月に出征し、同年8月戦死との公報が家に届いた。小学3年生の自分が、お骨を胸にさげ帰る不思議さや「父は何故いないの」と言う妹にじつと耐えた日々。昭和20年8月15日、玉音放送で戦争終結を聞いた母は、仏壇の前を思い出している。

「この思いから参加した」「お父さん。喉を閉じれば抱かれたこともない。美智子と呼ばれることもかなわず、やさしさも厳しさも与えられることなく、唯、心の中でじっと抱いた、お父さん。日本から、娘の美智子が面会ですよ」

「このたびの大戦を忘れてることなく、力の限り、英霊の顕彰と慰霊巡拝を続け読する」

安里君の「へいわ」を私なりに解釈すると、「平和はみんなが一生懸命にならなくと続かない」「何もしないで平和は続かない」ということである。

海外戦跡巡拝、全国戦没者追悼式などいざいざも「平和を守っていく行事」であると思う。平和は、意識しないで何ともない空気のようなものだが、大切なものである。このたびの戦争犠牲者は300万人とも、1000万人とも言われる。命を落とされた人の「いのち」は重いものだ。

戦時下の市町村役場に赤紙と徴兵審査を取り扱う兵隊事務係があった。こうした兵隊事務は、68年を経た今日も市町に引き継がれ、仕事の責任はある。英霊顕彰や追悼行事は市町の主催で実施されるよう希望する。

私たち一般市民が願う平和のつどいは、戦没者追悼行事なしでは存在しない。68年の平和が、この間に一人の戦争犠牲者も出さなかったのは事実であると思いを確かめている。

海外戦跡慰霊巡拝事業で訪問した国ミャンマーで、親善交流と平和友好のつどいにおいて、ヤンゴン市長（前駐日ミャンマー大使）から、「日本と戦争はしたが、今日のミャンマーがあるのは日本で学科や平和を学んだ自国の若者に支えられている。来ていただき、人と人との結びつきが太くなっとうれしい。」と再訪を願うメッセージを受けた。

平和記念植樹の申し出を受けたボルネオでは、「お互いに平和を見守るあかしとして絆を強めたい」と現地関係者が述べた。

結びとして次の言葉を述べる。先人のことばに「失って初めてわかるものがある。それは平和だ」。遺族として英霊に恥じない生活を続けていこう。

再生目指し学区遺族会総会開く

大津市上田上遺族会

大津市上田上遺族会は、永らく親会の田中清氏が学区遺族会長に就いて諸事業展開の要となつてこられた。平成12年度の滋賀県遺族会が、親会、婦人部、壮年部組織の一体化となった以降も、引き続き田中清会長のもと学区遺族会諸活動が展開されていた。

平成13年度に田中清会長が急逝され、平成14年度からは遺児会員である羽野克彦氏が学区遺族会長に就任された。就任当初は、学区遺族会の会長、副会長、会計、女性部長、監事などの学区役員を決定し、組織的な活動が展開されていたが、その後、役員個人の事情により学区遺族会役員を辞退したい旨の申し出が続出した。羽野克彦会長は自分の責任を感じ、やむを得ず全ての役職を自分で引き受けざるを得なくなりその後の経過をたどることとなった。

平成19年度途中で羽野克彦会長が病氣入院となり、



今後の決意を述べられた大西美智子さん

学区遺族会活動に大きな支障が発生することとなった。一方、学区内各町の遺族会では町内毎に協議し、輪番で世話係を務め、遺族会費の徴収、滋賀県護国神社お初穂料のお願いなど様々な遺族会活動を展開した。しかしながら、滋賀県遺族会の年間諸事業への参加は、そのお知らせが町内に届かず、ごく一部の会員参加にとどまり、学区遺族会全体での対応は殆ど出来ていなかった。

平成25年4月羽野克彦会長が逝去され、その後、学区遺族会活動が殆ど機能不全に陥った。

このため、有志が立ち上がり種々協議を重ね、学区遺族会の再生をめざすこととなった。約80名の学区遺族会全員が参加する総会を開催し、確かな組織を立ち上げることとなった。

平成25年7月28日、再生をめざした上田上学区遺族会の総会が大津市上田上市民センターで開催され、広



上田上遺族会総会に出席のみなさん

報委員会はこの総会を取材した。ともすれば、成りゆき任せの遺族会活動を多々見かけるなかで、現状を分析し、反省し、将来を見据えた活動に転換するべきであるとした大津市上田上遺族会の英断は特筆するべきである。

総会で協議された概要は次の通りである。

1、上田上遺族会の平成14年度以降から今日までの経緯と今後の運営について
平成19年度までは羽野克彦会長から年度毎の会計報告が行われていたが、平成20年度以降の年度毎の会計報告が行われなかった。このため、羽野克彦会長の家族から遺族会にかかる証憑、現金、預金通帳、関係資料などの提示を受けると共に、金融機関や学区社会福祉協議会等へも照会し、各年度の会計報告書を作成した。今後は、学区遺族会組

織を充実させ、役割分担を明確にし、年度毎の事業計画書並びに予算書を立案し、学区内の全ての会員が参加する総会で審議決定すると共に大津市遺族連合会からの通知書面は全ての会員に行き届き情報を共有できる体制とする。

2、学区遺族会名称変更について
行政の条例により上田上桐生町は大津市上田上学区から大津市青山学区への編入となったが、新規開発された住宅団地の青山学区に遺族会組織が無かった。このため、遺族会は引き続き上田上桐生町を含めた学区遺族会を組織し、名称を「上田上遺族会(青山)」として大津市遺族連合会に登録してきたが、今般、上田上学区社会福祉協議会からの補助金受領に支障を来すことが判明したため、学区遺族会名称を「上田上遺族会」に変更する。

3、上田上遺族会会則の策定について
上田上学区遺族会では、今日まで学区遺族会会則が無かったため、今般、滋賀県遺族会定款・規程並びに大津市遺族連合会会則に準じた「上田上遺族会会則」を新規に策定する。

4、過去の年度毎会計報告について
平成14年度〜平成19年度上田上遺族会会計報告書(年度毎)並びに、平成20年度〜平成24年度上田上遺族会会計報告書(年度毎)を、関係資料や各種聞き取り調査結果を踏まえて作成する。

5、平成25年度事業計画(案)と予算(案)について
平成25年度上田上遺族会事業計画(案)、平成25年度上田上遺族会予算(案)は、滋賀県遺族会並びに大津市遺族連合会諸事業への積極的参加とともに、学区慰霊祭の実施を中心とした事業計画(案)、予算(案)を提案する。

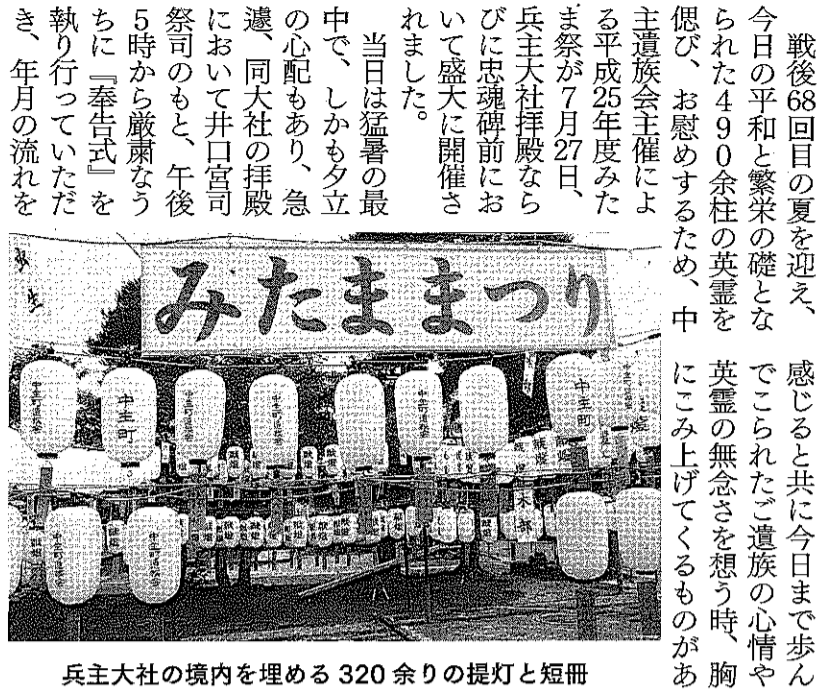
6、新役員人事の承認について
新規に策定された会則に基づき、学区遺族会の会長、副会長、会計、女性部長、監事の役員人事案を提案する。

7、その他
町別会員名簿の確認、忠魂碑の清掃実施、学区慰霊祭で法要を務める7ヶ寺住職へ新たに桐生町内の1ヶ寺住職の加入要請、学区慰霊祭への来賓参拝の案内先一覧表の作成等を提案する。

それぞれ提案説明後、質疑応答を経て全て原案通り承認され、新役員を中心とした再生の上田上遺族会がスタートした。質疑応答の中で、結束の強いローカルな上田上遺族会においても遺族会退会の話があるとのこと。これには、戦没者が国のため、村のため、ひいては家族のために命を捧げられた精神を慮り、根気よく対話を重ねていこうと発言され、一丸となった新たな遺族会組織をめざそうとする姿勢に心動かされた。(広報 田中正彦、谷口晋子)

慰霊の灯り 境内を埋め飾る

野洲市中遺族会長 白井 嘉嗣

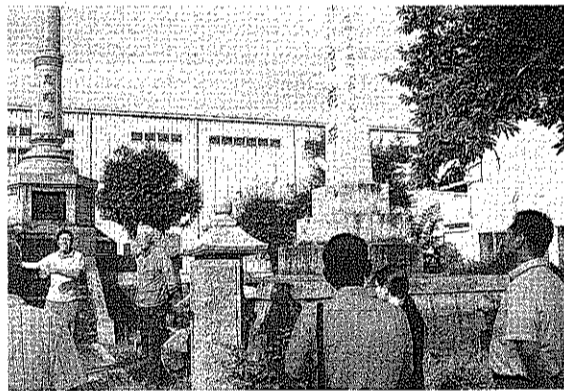


兵主大社の境内を埋める320余りの提灯と短冊

戦後68回目の夏を迎え、感じると共に今日まで歩んできた平和と繁栄の礎とな...

地域に開かれた忠魂碑

栗東市遺族会 織田 晃



学習の場として次世代に継承する忠魂碑

戦争の悲惨さや平和の尊さを改めて語り合い、夜の更けらるまで行く夏を惜しんで...

西川 マスさん(草津市)



その内、行くけど、もう少し待っててや

娘時代、男兄弟が出征し両親を手助けして農業をしていました。呉服商への縁談があり嫁ぎました。

おかあさんを訪ねて

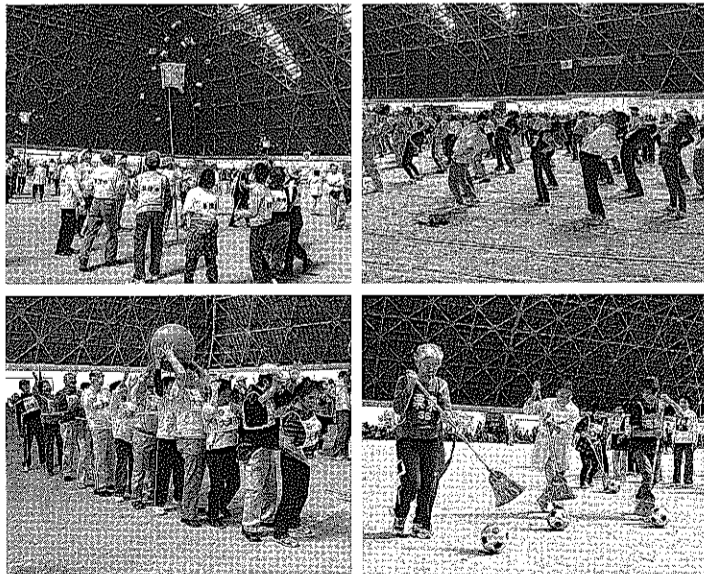
め舅いわく「電球が写っている」と...。飽食の現在には考えられない生活でした。

今では夫の分まで寿命をいただき、週2回のデイケア行きとテレビのクイズ番組と一緒に...

- 1. 子どもを中心とした平和学習の場として
2. 平和の継承、発信の場として
3. 行政と地域の住民の協働による施設の管理保全

第39回スポーツの集い

竜王町ドラゴンハット



1年越しの恒例のスポーツの集いが、秋風感じる9月29日(日)晴天に恵まれ...

第39回スポーツの集い 結果

Table with 4 columns: 総合成績, 種目別, 優勝, 準優勝, 第三位. Rows include categories like 近江八幡Bチーム, 玉入れ, 近江八幡Aチーム, etc.

遺族会員のツブヤキ

今までタブーとされていた部分もあるが、実際に体験した者にしかわからない戦争の真実を伝えて...

★みたまま祭境内で拾った声★

- ◆海軍に従事し、昭和19年ビルマで戦死した亡き主人の父の冥福を祈り、孫・曾孫5人とお参りしました。
◆昨年、父の没地ルソン島を巡拝団で訪れ大感激でした。
◆遺族ではありませんが、帰省中の息子と孫とお参りしました。みたまま祭は彦根の夏の風物詩です。ずっと続けてほしいです。

次世代戦跡訪問研修

平和のために

栗東市立栗東中学校2年生

吉田 実来

私にとって、この3日間はとても心に残る大きなものでした。沖縄というとても美しい土地で、二世代前に起こった悲しい事実を学べたことは、自分にとって大切な財産となりました。

たくさんの方の戦跡へ訪問させていただきましたが、3日間の中で特に印象に残っているのは、2日目に行った糸数アブラガマです。沖縄戦時、住民や兵隊が避難したこの壕には、軍医や看護婦、ひめゆり学徒隊も配属されました。また、戦争が激化するにつれて南風原陸軍病院の分室にもなり、600人以上の負傷兵や一般住民で埋め尽くされていたそうです。苦しむ人々のうめき声がガマの外にまでこぼれて、それはなんとも言えない状態だったそうです。当時の状況を想像するだけで、大きな恐怖心がこみ上げてきます。

内部はほとんど当時のまま残されており、より戦争の悲惨さを感じることができました。ガマの中は暗く、狭く、冷たく、外の世界とは全く違い、戸惑いました。こんなところで、たくさんの人々が平和な社会を夢見ながら、悔しい思いをしながら、この世界へ大きな未練を残しながら、亡くなっていったかと思うと心が痛みます。

私が最も印象に残っているのは、ガマの中を案内して下さった方が最後に話して下さった、ある男性の言葉です。その男性は、自殺した人の死体を処理する仕事をされているそうです。毎日死体を処理しているうちに、「悲しい」という気持ちが分からなくなると、自分で自分のことが怖くなり、このアブラガマを訪れたそうです。その男性はガマの中で涙を流しながら見学し、ガマを出る前に涙を拭いて、案内人さんにごう言ったそうです。「ここに訪れた方々へ伝えて下さい。『自分の人生に替え玉はない』と。この一言を言って、ガマを後にされたそうです。

た、ある男性の言葉です。その男性は、自殺した人の死体を処理する仕事をされているそうです。毎日死体を処理しているうちに、「悲しい」という気持ちが分からなくなると、自分で自分のことが怖くなり、このアブラガマを訪れたそうです。その男性はガマの中で涙を流しながら見学し、ガマを出る前に涙を拭いて、案内人さんにごう言ったそうです。「ここに訪れた方々へ伝えて下さい。『自分の人生に替え玉はない』と。この一言を言って、ガマを後にされたそうです。

糸数アブラガマをはじめ、この3日間で本当に様々なものを学びました。しかし、学んだだけ、行っただけで終わらせてしまおうではなく、私たちの若い世代が『これから』をどう伝えていくかが重要なのです。戦争の悲惨さ、平和の尊さを知った私たちは、多くの人への平和を願う強い思いを伝えていかなければなりません。ひとりでは変えられなくても、多くの人が想いを共有することで、沖縄戦のような悲劇を食い止めることができると思います。

人が人を傷つけあい、尊い命が簡単に亡くなってしまふ、自分が

分からは命を絶つてしまふ、そんな悲しいニュースが多い現在。そんな世界を変えられるのは、自分に誇りをもてる、強い心だ

笑顔になれない

高島市立青柳小学校6年生

竹原麻利子

3日間鹿児島県へ平和学習に行きました。私は、知覧特攻平和会館とホテル館が、一番印象に残っています。

知覧特攻平和会館では、特攻隊員1036人の写真が並べられてありました。自分より少し年上の人たちが自分の命を犠牲にして、国のためにと亡くなっていった過去があるなんて信じられません。私が家族だったらとっても悲しかったと思います。

写真以外にも、親に宛てた手紙など遺品が残っていました。これを見ると戦争は残酷なものだったんだなと思いました。

ホテル館では、特攻隊員のお母さんと呼ばれていた鳥浜トメさんのお孫さんから話を聞きました。特攻隊員は、トメさん

と聞いています。温かい心の輪を、平和を学んだ自分から広めていきたいです。

心配をかけたくなって、トメさんの前では笑顔で話していたそうです。私なら明日死んでしまふのだと思うと、こわくて絶対に笑顔になれないだろうと思いました。

朝、特攻隊員のまくらを見た涙でびしょびしょだったそうです。もう大好きな家族や友人に会えないなんて、とっても悲しいと思いました。

出掛け2時間前の特攻隊員の写真を見て、おどろきました。みんな笑顔だったのです。本当はともかく、悲しいのに、今から出掛けに行く人とは思えない笑顔でした。

私は、鹿児島へ平和学習に行つて考え方が変わりました。前は、この生活はあたりまえだと思っていました。でも本当は、ものすごく幸せなことだったんだなと思いました。

今、日本では戦争をしていないけど、人の心を傷つけたり、殺そうとする人がいます。こんなことを考える人がいなくなればいいなと思いました。

参加者を募集しています!!

小中高生の戦跡訪問研修の旅

～次世代活動委員会事業～

滋賀県から後援をいただいています

- 鹿児島方面

日程 平成26年3月25日(火)～27日(木)

募集対象 小4～高3生 40人

参加者負担金 15,000円

※知覧特攻平和館・ホテル館など、沖縄戦に特攻隊員として飛び立った兵士の面影を顕彰し、平和について学習します。
- 沖縄方面

日程 平成26年3月26日(水)～28日(金)

募集対象 中1～高3生 32人

参加者負担金 23,000円

※普天間基地を展望し、住民・兵士の避難壕にもぐり、太平洋戦争では国内で唯一の地上戦が行われ、甚大な被害をこうむった沖縄に数多く残る戦跡を訪ねて平和学習をします。

※県内在住の人ならだれでも参加できます。都市ごとに定員があります。近隣の遺族会役員または滋賀県遺族会事務局までお尋ね下さい。

*申込締切 平成25年12月20日まで

靖国参拝応募作品

俳句

奥野 きぬ・選

靖國の父とひととき梅の花
靖國や柏手ひびく弥生かな
(東近江市) 山田 智恵

父雄姿求めて老いの春詣
春うらら靖國の宮去り難し
(愛荘町) 土田 幸夫

父在わす神域清し浅き春
さくら咲く熱海の宿に遺児集ふ
(米原市) 藤田 紀代

春を呼ぶ開花予報はこの桜
春しぐれ御紋章仰ぎ雨宿り
(野洲市) 野路 嘉久

父雄姿求めて老いの春詣
春うらら靖國の宮去り難し
(愛荘町) 土田 幸夫

父雄姿求めて老いの春詣
春うらら靖國の宮去り難し
(愛荘町) 土田 幸夫

滋賀県遺族会靖国神社参拝の旅「短歌」「俳句」募集は今回で3回目となるが、今回も多くの皆さんから感動の作品を寄せていただいた。短歌選者、俳句選者それぞれから添作と総評を受け、前号(平成25年6月30日発行)に引き続き掲載する。

なお、短歌選者、俳句選者からの総評は前号掲載済みにつき省略する。
(広報委員会)

短歌

母坪みち代・選

靖國の宮の御前で手を合わす就学前の
孫の微笑み
(彦根市) 林 恵美子

妻誘い父祀られる靖國に痛みし膝で歳
月思ふ
(彦根市) 中村 正

あの友とまたも出会えた靖國は互いの
無事を確かむ場所
(彦根市) 中村 正

伝え度きこと山ほどを心して靖國の宮
に今日も参りぬ
(高島市) 岸田 孝一

武蔵野のスカイツリーは靖國の宮よ
り高く東にそびゆ
(高島市) 岸田 孝一

後世に誇れる父は遊就館にありし日の
遺影永久に納めらる
(大津市) 原田 政子

南方の地図を広げて忍ぶ日の戦場の父
姿浮かびぬ
(竜王町) 大西 初枝

父在わす神域清し浅き春
さくら咲く熱海の宿に遺児集ふ
(米原市) 藤田 紀代

春を呼ぶ開花予報はこの桜
春しぐれ御紋章仰ぎ雨宿り
(野洲市) 野路 嘉久

父雄姿求めて老いの春詣
春うらら靖國の宮去り難し
(愛荘町) 土田 幸夫

父雄姿求めて老いの春詣
春うらら靖國の宮去り難し
(愛荘町) 土田 幸夫

花おそし靖國まいり適う日の孫の合格
春のたよりを
(大津市) 原田 政子

古希の春父こえし齢(よわい)社殿の
前で臉閉じれば見ぬ父の顔
(愛荘町) 前田 いそ

靖國を政争の具にもあそぶ記事見て
覚ゆ胸の痛みを
(東近江市) 中村 健二

年毎の靖國もうで思い立つ幻の父呼ぶ
心地して
(東近江市) 中村 健二

参るたびに白鳩むらがるその中に雄々
しくそびえる靖國大鳥居
(大津市) 原田 政子

手洗いで心身清め歩みより父のみたま
の昇殿願う
(大津市) 原田 政子